

書 評

アンドウ・ゼンパチ著「ブラジル史」

岩波書店 東京 316 + 10 pp. 1983 年

28年前に公刊されたアンドウ・ゼンパチ氏の『ブラジル史』(河出書房, 1956年初版, 1959年再版)は, 植民地時代から現代までを叙述した日本における最初で, かつ唯一のブラジル通史であって, 長い間絶版となっていたため最近まで幻の書といわれていた。本書はこれを基礎としてほぼ全面的に書き改められているものの, 今日でもなお翻訳書を除いては類書が見当らない⁽¹⁾ことから, パイオニア的労作であることに変わりはない。ブラジルに在住して日系人社会を啓蒙するための文化活動に熱心であった著者⁽²⁾が, ブラジル史を日本に紹介するつもりで書いたとされる点も前の書の経緯と同じである。今回は, 著者のそのユニークな視点に加えて, 西川大二郎教授が補筆と改稿の労をとられており, その厳密で客観的な研究姿勢が本書の学問的価値を決定づけている。それは, 注記がひじょうに充実しているのと引用文献や資料の出典がことごとく明らかにされていることからもうかがえる。史観について著者は, 「ブラジル史に初めて唯物史観を取りこんだ」歴史家のカイオ・プラド・ジュニオールを筆頭に, レオンシオ・パスパウン, ネルソン・ウェルネッキ・ソドレ, ジョアン・ルシオ・デ・アゼヴェドの4人の史家の著作に負うところが多いとまえがきで述べているが, この他, 経済史家のロベルト・シモンセンやセルソ・フルタードの著作もひんばんに用いられている。

本書は冒頭で「ブラジル社会を総体として理解する目的でまとめたブラジル社会の形成の歴史」であるとしている。その意味でブラジル社会史の概説書ともいえる。まず本書の構成を目次によって示しておこう。

第1部 ブラジル「発見」の前史

第1章 ブラジルの「発見」/第2章 ブラジルの先住民

第2部 植民地時代

第1章 ブラジルの植民・開拓/第2章 総督政治/第3章 奴隷制度/第4

章 「砂糖時代」／第5章 オランダのノルデステ占領／第6章 ポルトガルの絶対王制と重商主義／第7章 インディオの奴隷化とイエズス会／第8章 「金時代」／第9章 「金時代」の終結／第10章 「金時代」の南部の発展

第3部 ブラジルの独立

第1章 ポルトガル王室の移転／第2章 ブラジルの独立／第3章 近代化の曙光

第4部 近代化への道

第1章 奴隷解放と共和革命／第2章 近代移民とコーヒー生産の発展／第3章 「コーヒー時代」の奥地の展望／第4章 コーヒー危機とその影響／第5章 サン・パウロ共和党

第5部 現代

第1章 ヴェルガスの擡頭と失脚／第2章 民主主義への過渡期／補章 サン・パウロの農業協同組合の発展

この目次からも理解されるとおり、本書では植民地時代に重きが置かれ、各時代の先導的産業で見ると、「砂糖時代」、「金時代」、「コーヒー時代」に焦点を合わせてある。この先導的産業のいわば「ブーム」による時代区分の方法は、ブラジルの史家の間でよく用いられ、本書もそのオーソドックスな例になっているといえる。

次に、本書の内容を要約しながら、評者の若干のコメントを添えておきたい。

第1部ブラジル発見前史の第1章では、「ブラジル発見」をインド貿易の過程で生じた歴史的に必然的な出来事であった（3頁）として発見の経緯を概観し、第2章で先住民であるインディオの生活様式などそのアウトラインを説明する。

第2部植民地時代第1章では植民者とインディオの混血化の過程を述べ、その背景は、ポルトガル本国から渡来の植民者の多くが単身で、性的関係からばかりでなく、ポルトガルとは気候・風土が異なった未開の熱帯地で生活するためにインディオの女と家庭を持つようになったことにある（33頁）という。こうして、植民者とインディオとの間に生まれた混血者という社会形成の基本的要素に、奴隷貿易によってアフリカから連れてこられた黒人の要素が加わったとし、カザ・グランデと呼ばれたエンジェニョ主の邸宅において黒人の人種的、文化的影響が見られたとするジルベルト・フレイレの理論を積極的にとりいれ

ている（73－74頁）。そして、ポルトガル人植民者、植民者とインディオとの混血者、奴隷としてアフリカから来た黒人の3つの人種的要素の輪郭説明を第2部第4章までに終えている。

第5章では、占領下においてオランダ人が築いた商業都市がブラジル商人階級の発展を促し、オランダ人退去の後もポルトガル商人が後を継いで商人の勢力を強化してブラジル社会に新しい階級をつくった（85頁）という。第6章では特許会社の設立に触れ、その設立は豊富な資力を持つユダヤ商人に依存するほかになく、ポルトガル国王は出資するユダヤ人には宗教裁判所によって財産を没収しないという条件で彼らを歓迎したとして、ブラジル商業活動の民族的基盤にさきのオランダ人とこのユダヤ人があったことを強調する。第7章では、バンデイラの活動について、サン・パウロの植民者が金鉱を探すために組織した探検隊であったが後にはインディオの補獲も大規模にやるとしながらも、その行動範囲がトルデシリャス境界線を越えた結果ブラジルの領土は拡張されて大体今日の領域が決定されることになったと一応その活動を評価している。これと並んでイエズス会士は、教化のために植民者よりも早く未開の奥地に入り開拓の先鞭を付けたパイオニアであったとし、歴史の舞台では激しい対立関係にあったバンデイラとイエズス会の双方に良い評価を与えており、本書のもつ柔軟な姿勢を感じることができる。

この第7章とつづく第8章「金時代」を中心に第2部植民地時代では、歴大な一次資料に経済学のメスをあて、ブラジル経済史学の創始者と目されるロベルト・シモンセン著の *História Econômica do Brasil, 1500-1820* (3a ed., São Paulo, 1957) からの引用が多く見られ、統計資料に客観的裏付けを与えている。また、「砂糖時代」のエンジェニョと「金時代」の鉱山を比較し、後者の採金活動では奴隷を酷使して生産量を増加させることがむずかしかつたため、奴隷小屋にも牢屋のような陰惨さはなかった（112頁）という。金鉱が発見されてはじめて大きな国内市場が出現し、北東部ではサン・フランシスコ川を船によって、南部ではらばを用いて、金鉱地帯を中心とする東・北・南の遠隔地との交通が開け、以前は孤立していた各地方間の経済的連携が緊密になったとする。この見解は、最初に紹介した経済史家のカイオ・プラド・ジュニオールやセルソ・フルタードのものに一致する。そして、採取した金は五分の一を税に取ら

れ、産出量が減るにつれて強制取立は毎年はげしくなるばかりで、ポルトガル政府を呪う声が金鉱地帯に漲ってきたと記述をすすめる。

第9章では、金鉱地帯の衰微につれて西部へ移動した黒人やムラトなどが、私有地になっていない未開拓地を開墾し、ポッセという土地制度により土地所有者となっていたと述べる。第10章では「金時代」における南部の発展に触れており、南部牧場社会のエスタンシア（牧場）、エスタンシェイロ（牧場主）、ベオン（牧夫）、ガウショ（乗馬に巧みなインディオ）、カウディリョ（牧場主である地方の権力者）などについての解説は分かり易い。

第3部ブラジルの独立の第1章と第2章では、短期間の繁栄を示したマラニョン地方の綿花栽培とリオ・デ・ジャネイロの商人が目にした新輸出商品のコーヒーに触れるとともに、ポルトガル王室のブラジル移転を契機に実現した独立、絶対君主制の樹立、その破局に至る政治的变化を述べる。第3章近代化の曙光では、奴隷貿易禁止の時期、コーヒー生産はリオ・デ・ジャネイロのパライバ川流域で生産を拡大して世界の産額の半分を占めるようになったけれども、19世紀末には同地方のコーヒー産業は衰微したという。また、ノルデステ地方では、小規模な製糖所のバングェに代わって蒸気を動力とする大精糖工場のウジナが出現し、製糖業は変革期を迎えたが、このウジナが砂糖きび以外の作物の栽培地を縮小させ、食糧不足により民衆の生活を悪化させたとする。一方、この時代に登場するブラジル最大の産業資本家のマウア男爵（後の子爵）をとりあげ、諸事業破産の原因をその自伝から（1）国内市場の狭隘、（2）道路の未発達、（3）工業への資本不足、（4）賃金労働者の不足であったとし、これを敷衍すればブラジルの近代化を困難にした条件であった（182 - 184 頁）という。さらに社会問題として失業者の激増や奥地の貧農をとりあげ、これは奴隷制と巨大私有地の副産物として発生したもので、その存在は奴隷制度がなくなるまで政治的ボスと組んで常に政府を悩ました（191 頁）とする。

第4部近代化への道の第1章では、奴隷解放と共和革命を対象とし、前者の問題ではカストロ・アルヴェスの奴隷反逆を称えた詩を紹介しており、本書の幅広い構成の一端を知ることができる。奴隷解放後の社会問題では、パライバ川流域コーヒー地帯の解放奴隷は、当時の新興コーヒー地帯のサン・パウロ市に移ったり、リオ・デ・ジャネイロ市の丘の上のファヴェラに住み、ノルデス

テ地方ではレシーフェのような海岸都市へ出て浮浪者化するか、農場内に留まって隷農になったという。本書の特色のひとつはブラジル社会の地域的多様性の理解を主眼としていることであって、奴隷解放をめぐるブラジル各地でさまざまな社会変化が見られたとの説明は親切である。奴隷解放の翌年に共和革命が勃発して新時代は制度や人心を一新したけれども、革命は陸軍の独断的なクーデターによって行なわれ、共和党も支持母体が大地所有者階級であったために民主的なものとはなりえなかった(207頁)として、これ以後の政治的变化について著者は否定的な見解を展開させている。

第2章はいよいよ著者の個人史にも重なってくる近代移民とコーヒー生産の発展時代の記述である。新時代の歴史の舞台となるサン・パウロ州のコーヒー生産は移民労働力に依拠して発展し、これを中心とする南東部や南部地域は、社会的にも文化的にも近代ヨーロッパ移民によって特色づけられたという。また、鉄道の開通とコーヒー精選工場の蒸気化もほとんど同時に行なわれ、ファゼンダの生産力は飛躍的に上昇したとするが、ファゼンダ経営におけるファゼンデイロとコロノとの関係に内在する非近代性が都市での工業の発達を阻止し、工業の未発達がファゼンダの近代化を妨げるという悪循環をつくった(226頁)とも述べる。第3章では、19世紀後半から第二次世界大戦までのいわゆるコーヒー時代に、この発展から隔絶された広大な地域があった(229頁)とし、ノルデステ地方奥地の牧畜地帯とアマゾン河流域地方のゴム社会をそれぞれ代表的文学作品の内容を引用しながら紹介する。第4章ではコーヒー危機をとりあげ、1896年ごろの第1次コーヒー危機によって大ファゼンデイロが解体して多数の小土地経営者が擡頭し、その経済的消費力によってサン・パウロ市に工業発展の基礎を与えた(257頁)とする。さらに、1914年にノロエステ鉄道が開通し、サン・パウロ州の内陸部では土地販売会社が自営農家向きに農地を細分化して分譲売却をはじめ、自営農でもコーヒー園経営者になりえたのは画期的であったし、日系人もコロノから自営農になれる段階に達した者が多く、1930年ごろには新コロノたちもファゼンダを巣立って独立自営の道へ進出しつつあった(261-262頁)という。第5章ではヴァルガス革命を扱う。まず、サン・パウロ共和党の存在はコーヒー産業の盛衰に全面的に依存していたとし、国内の政情の動揺、世界恐慌を背景とするコーヒー価格の暴落、サン・パウロ共和

党の慣例を無視してのサン・パウロ州出身大統領の推挙、これに対して南リオ・グランデ共和党とパライバの政党を引き入れてミナス共和国の結成した自由同盟が反発する、という一連の過程において、ヴァルガスを首領とする1930年革命の勃発となった（273 - 276頁）という。本書の記述は、ほぼ1930年代、つまりヴァルガスの擡頭のころで終わっているとあとがきでことわってあるので、要約もこのあたりで止める。ただし本書ではこれ以後、さきに目次で示したとおり第5部で現代史が述べられ、補章では下元健吉のコチア農業協同組合とF.ジュリアンの農民同盟を関連づけて締めくくっていることを付け加えておく。

以上、本書の要約を書いてきたが、ここで評者の気付いた点を少し述べておきたい。

まず第1に本書がその特色としてブラジル史の基底部分に的を絞っていることである。それは、ブラジル社会の主要な人種の要素であるポルトガル人、これとインディオとの混血者、アフリカ黒人の3つの説明に力を入れ、さらにヨーロッパや日系移民の要素を加え、これらの要素に関連させて各地方の地域的特性をとりあげている点である。つまり、黒人文化の影響の強いノルデステ地方、ヨーロッパ的色彩の濃い南部地方、混血者が圧倒的に多い奥地のセルトンといった具合である。確かにブラジルはまだらの巨象であるとか、文化的に孤立した島の集合体であるとか形容されるように、表面上はひとつの国でありながら地域的な多様性がその社会の特徴となっている。従って、ブラジル史を総合的に見る時には、地誌の面からの考察も必要である。しかし、地誌を扱う場合、どの地方に重点を置くかで史家の間に食い違いが生じており、これをいかに克服して総合史と地誌とのバランスを保つかが課題でもある。本書は各地方固有の歴史的背景の説明に力を入れるなかで、ノルデステ地方とサン・パウロ地方が強調されている。

第2は本書の特色が、日系人社会のコロニアへの啓蒙を兼ねてのブラジル史紹介とされる点である。アンドウ氏と同時代にブラジルに在住され盛んな文芸活動をしてこられた古野菊生氏がその著作『ブラジリアへの500年——物語ブラジル史』（帝国書院、1963年）のあとがきに次のような一文を書いているので引用しておきたい。

「ブラジルという国土に移ってきて、そこに生きてきた私たちは、この国

を愛するよりほか、生きる道はない。……この国の生いたちを知り、理解を深めて行くにつれて、やがてそこに、おのずからなる愛情がわいてくるはずである。その理解の一つの手がかりとして、いくらかでも役立てばと考えて、私はこの本を書いた」。

アンドウ氏も古野氏同様、ブラジル在住の日系人同士にブラジル史への理解を深めてもらいたいとの願いをこめて、本書を執筆したと思われる。補筆・改稿者の西川教授も本書のあとがきで、「アンドウさん自身はコロニアを啓蒙しなければ、という情熱によって行動されたと考えられるが、そのことがアンドウさんの勉強を刺激し、コロニアの人々もまたこれを支えた」とし、ブラジル史研究については「文献を読み集めているあいだに、自分の血や肉に化してしまった部分が少なくないにちがいない」と述べておられる。まさしくこの点に、アンドウ氏自身の史観に基づいてまとめられた本書のユニークさがあり、パイオニア的労作として高い評価が与えられる所以ともなっている。

次に、まえがきでもことわってあるが、あえて評者の希望を述べると、やはり地域的多様性に加えて統合面からのアプローチが欲しかった点である。例えば、18世紀後半の植民地ブラジルに領土的枠組みを与えたポンバル侯時代、ブラジル生まれの皇帝であることから国民意識の統一を果たしたペドロ2世下の第2帝政期、サン・パウロ州のみではなくブラジル全体の利害を代表させて近代国家としての発展を企図したヴァルガス時代などについて、もっと積極的な評価が望まれるのである。さらに、ブラジル社会の近代化における転換期をいつとするかについては、帝政崩壊による共和革命よりむしろ、1930年のヴァルガス革命をとりあげるべきであるので、ヴァルガス以後から現在までの記述に多くの省略が見られることには物足りなさを覚える。

また、下元健吉の指導によるコチア農業協同組合の発展を、フランシスコ・ジュリアンの農民同盟に對置しうる農民解放運動とみなしておられるが、果たして下元健吉を農民運動家と呼べるのであろうか、少なくとも彼自身にその自覚があったかどうか、若干の疑問が残るところである。

この外、用語の面で、例えばカタカナ表記の「カピタニア・エスピリト・サント」や「カピタニア・バイーア」と「カピタニア」をそのまま用いることが適切であるかどうかといった点も気になりはするが、今後は、本書でいぬい

に示された数々のブラジル特有の用語を基準に、日本における「ブラジル史」研究もカタカナ表記や用語の面でさらに整備されてゆくことであろう。

ともあれ、本書の出現によって日本の「ブラジル史」研究が新しい段階に入ったことをよろこびたいし、この先達の勝れた業績を基盤として今後の研究がよりいっそうの進歩をとげることが期待されるのである。

(付記) アンドウ氏個人について、中国新聞社の一井卓也氏と京都外国語大学の古野菊生氏から資料や文献を貸していただいたことを厚くお礼申し上げたい。

註

- (1) 近代史を扱った文献では次のものがある。齊藤広志『バルガス以後——ブラジルの政治と社会(1930—1969)』(ラテン・アメリカ協会, 1970年)。齊藤広志・中川文雄『ラテン・アメリカ現代史I, 総説・ブラジル』(世界現代史33, 山川出版社, 1978年)。今西正雄『ブラジル社会経済史(1870—1974)』(啓文社, 1974年)。翻訳書では以下のものがある。フレデリック・モーロ『ブラジル史』(金七紀男・富野幹雄共訳, 文庫クセジュ, 白水社, 1980年)。A. ソウト・マイオール『世界の教科書=歴史: ブラジル』(富野幹雄編訳, ほるぷ出版, 1982年)。
- (2) アンドウ・ゼンパチ(安藤全八), 本名は安藤潔。1900年, 広島県に生まれる。1924年, 東京外国語学校(現東京外国語大学)ポルトガル語科を第1期生として卒業すると同時に, 移民輸送監督となって渡伯。これ以後約35年間ブラジルに在住した。1959年帰国して広島市外に在住するかたわら, 1965年設立のサン・パウロ人文科学研究所の中心メンバーとして活動されたが, 昨年10月27日, 83歳で物故された。謹んでご冥福を祈りたい。代表的著作は以下のとおり。『葡文典接続法解説』(サンパウロ市協同社, 1937年8月)。『ブラジル史』(1940年9月)。『ブラジル史』(河出書房, 1956年8月)。『コチア産業組合30年の歩み』(1959年7月)。

(京都外国語大学 住田育法)